



## 武間富貴同窓会名誉会長

に聞く

## 新島八重のことなど

聞き手

河野 仁 昭

新島先生と武間さんのお母さん

——武間さんは新島八重さんに、随分可愛がられたとうかがっていますが、裏先生のことと何か。

武間 私が生れる前に先生はすでにお亡くなりになっておられました。おばさま（八重夫人のことで、私は小さいときからそうお呼びして来ましたので）は、お一人で寺町のあのお家におられました。私達の家が極く近かったのによくお宅へ行き、可愛がって頂きました。私は先生の事については全然存じませんが、私の母は幼い時から「新島のおじさま」に大へん可愛がって頂いたようです。

——お母さんが？ どこで？

武間 神戸です。私の母の父、即ち私の祖父鈴木清は、三田藩、九鬼家の家老で、新島先生の信頼が厚く非常に親しくして頂いていた様でした。それで、先生は何かにつけ九鬼家と意思の通じる鈴木に接触しておられたようでした。神戸女子学院や、神戸教会を設立せられる様な時などにもね。

そんなことで、新島先生が鈴木の家によく来られたものだから、家族みな先生御夫妻

に親しくしていただき、特に母は、小さい時から先生御夫妻に大変可愛がって頂いたと言っております。

——なるほど。

武間 母はよく言っていました。新島のおじさまは、とても面白い方だったが（今日いうユーモアたっぷりの方）、むしろ、おばさまにはよく叱られたそうです。

——新島先生って面白い方だったんですか。

武間 そうらしいでしたよ。子供にとりましてはね。

先生がお体の調子が悪くて、須磨で養生をしておられた時、母もつれて行って頂いたそうです。時たまおばさまが外出なさると、「ユキ坊（母の名前が幸恵）、おばさんが、お留守だから、へままごとくしようか」といって、台所へ行き、材料を探し出して来られ、上手にのり巻のおすしを作られ、「さあ、ユキ坊、尺八を吹こうか」と言われて、尺八を吹くような具合にして、その海苔巻のおすしを端から上手に召し上ったの満足そうなお顔、そういう面白い面が先生におありだった事を母から聞いていました。その他にもいろいろね。



大 沢 善 助 氏

——ご夫妻にはお子様がなかったのですから、なおさら可愛がられたんでしょうね。

### 大沢善助さんのこと

——武間さんはおじいさまの善助さんについてご記憶ございますか。

武間 そりゃもう、私は、じじっ子でしたもの。

——善助さんは、同志社の創設期以来、殆ど生涯にわたって同志社に貢献して下した方ですが、新島先生を知られたのはいつ頃だったのですか。

武間 祖父から聞いた話によりますと、新島先生が寺町のお家に住み始められました頃じじは、寺町丸太町を南へ下った所で米屋をしていたので、先生のお家へお米をとどけに

行くたびに、先生が大勢の人達を集めてお話をしておられたので、じじもそのお話を上がり小口に腰をかけて、聞いていたんだそうです。いつも、よいお話をなさるので、新島先生は大変偉い人だということがわかり、出入させて頂き先生に可愛がって頂いたので、先生のお仕事をお手伝いするようになったのだと聞いていました。

——『回顧七十五年』（私家版、昭和四年四月）という本がございますね。

武間 あの本は、じじが七十五歳になったとき、「わしがしゃべることを筆記してくれ」と申しましたので、私が口述筆記したものです。

よう憶えていると感心するほど、いろんなことをしゃべりましたので、よいことも悪いことも年月日も正確にみなそのまま書いてあります。じじが電燈会社の社長時代（明治の中頃）福井方面では輸出用の羽二重の生産が盛んで、この地に電気が必要であることを痛感し、敦賀までしか鉄道の通じていなかったその時代に大雪の中、無理をして視察に行ったのでひどい凍傷にかかり、それが原因で脱疽で片足を切断して、それ以後、ずっと片足

は義足をはめておりました。にもかかわらず京都電灯会社が叡山にケーブルカーをつける時など、毎日、河原町三条から人力車で八瀬の現場を見に行っておりました。会社をやめましてから、この関田町の土地を譲りうけ二階建の小さい家を建て、ばばと悠悠と余生を楽しんでおりました。

祖父の亡くなりましたあと、私の父徳太郎が、その家を同志社へさし上げました、相国寺門前の西側にある小さい二階建の家がそれで、当時は厚生館として使ってたておりました。

——大正六年に今出川通りに電車が開通して、その騒音防止にということで松の木を沢山寄附されたのも大沢善助さんですね。

武間 私が女専にいたときです。電車の音がやかましく、埃も入る事やろし、風景もわるくなるだろうからと言いまして、今出川通りに面した同志社の東の端から西の端まで、ずっと松の木を植えたんです。それがいまだにああしてありますから、よいことをしてくれたと思うて居ります。

### 新島八重夫人のこと



武間富貴同窓会名誉会長

——ところで、八重さんはどんなお方だったんですか。

**武間** 一口にいうと、気丈な方です。先生が亡くなられてからも、あの広い、大きいお邸ですっとお一人で頑張っておられました。

気丈でなかったらとても女一人で住めるところではありませんよ。当時はまわりに家などなくて、昼間でも恐いような所でした。女一人で、夜はよろい戸をしめる程度でしょ。

——会津女武士ですか。

**武間** ほんとうにそう。今も玄関のところに呼びリンがわりの鉦がぶらさがっているでしょう。

——あります。

**武間** ある時、荒々しい男が五、六人きて、あれをカンカン鳴らして、「金を出せ」

とおばさまをおどしたそうです。おばさまは

びっくりせられたのですが、すぐに気をと

直し、玄関を入ったところに梯子段があるで

しょう、あそこから上にむかって、「タケダ

君、なにやら君」と男の名前をいっばい呼ん

で、「お前らなにしろんや、はよ下りて来

て」といわれたので、二階には誰もいなか

たのですが(笑)、それをきいて、男たちはび

っくりして帰ったそうです。おばさまはそれ

ぐらい度胸が据わっておられたのです。こ

うときはこうするもんやと、あとで教え

て頂いたことがありました。(笑)

——会津籠城のとき、男の扮装をして戦っ

たというのは実話でしょうか。

**武間** 本当らしいですね、私もおばさんか

らようきかせてもらいましたし。同窓会の会

合が、若松でありました時にも、向こうの人

たちが自慢のように言うておられました

た。あのおばさまならそれくらいのことはや

られたと思えました。そういうお人柄でし

た。晩年のように太ってはおられなかったよ

うでしたが。

——でも、一面ではとてもハイカラ好みだ

ったんでしょう、武士的というよりも。

**武間** それはね、外人の奥さんたちや、宣

教師たちの感化やと思います。当時たくさん

おられましたからね。その人たちから英語も

習って、女紅場(後の府立第一高女)で英語

を教えたりしておられましたからね。

とにかく、随分勝ち気な方でした。面白い

話があるんですけども、内緒の話ですが有

名な話で、私たちの寺町の家が火災にあいま

して河原町のほうへ移りましたが、その裏に

お風呂屋さんがあったんです。おばさんがも

うだいぶ歳をとられてからのことですけど、

そのお風呂へ朝の五時頃から入りに行かれた

のだそうです。

——朝風呂ですね。

**武間** ところが朝はやくから、タオルと桶

をもってお風呂に行く女の方がもう一人あり

ました。それはそのころ京都の元老の一人で

あった田中源太郎さんのお妹さんの滋野さん

で、千家のお茶の奥義をきわめてお茶の先生

をしておられました。家は富小路の丸太町

で、この方もなかなかの勝ち気な方。このお

ばさんも朝早くお風呂へ行かれるんですけ

ど、新島のおばさまが先に入っておられると、

滋野さんは折角のお風呂へ入らずに帰ってし



大沢家（大正3年6月頃）前列右から1人目武間富貴、3人目祖母みは、5人目祖父善助、後列右から母幸恵、父徳太郎の各氏

まわれ、滋野さんが先きにはいっておられたら、新島のおばさまはご機嫌ななめで、お風呂に入らずに帰ってしまったので、この界限では有名な話であったようです（笑）。  
——どちらさんもどちらさんですね。

### 八重夫人とお茶

**武間** おばさまは明治四十年ころ、寺町の新島家の土地と家屋とを同志社に全部寄附をなさいましたので、同志社は感謝してそれを頂き、おばさまには金六百円也を年々差し上げる事にせられました。ところが、おばさまはそれを頂かれるとすぐにお茶道具を買ってしまったので、お小遣には相変らず不自由しておられたらしく、父によくねだりに来ておられましたので、父が、「うちの娘達にお茶のお稽古をして下さい」とお願して、金五円也の月謝をさし上げていた由です。姉はその時、もう女学校へ行っていましたから一生懸命お稽古をしていましたが、私はまだ小学生でしたから慾も興味もなかったので、お菓子ばかり頂いてちっとも気を入れてお稽古しないので、よく叱られました。

——そのような事からお茶の教授を始めたんですね！

**武間** 土曜日が来ると、おばさまはいそいそとお茶の用意をなさって、いろいろの方面のお友達に是非とのご案内で、次々といろんな方が来られました。こうなるといつも同じ

お道具ばかりは使えませんでしたので、次々と筋の通ったお道具が使いたくなられたのも、無理ありませんね。

——どんな方々が来られたのですか。

**武間** 京都にお住いの九鬼家の関係の方々や、千家さんでお知り合の町の方々等々。建仁寺の住職さんも来て居られ、いろんなお話をしておられました。建仁寺でお茶会などのある時は、よく私も連れていって頂き楽しんで頂きました。ところが、ある時、住職さんが、おばさまに、袈裟を差し上げられたので、「新島夫人が仏教徒になられた」と世間の人達の噂になりました。

——八重夫人はどなたにお茶を習われたんですか？

**武間** 裏千家円能斎宗匠の直弟子と聞いています。

——新島邸の座敷を茶室に改装されたのは、武間さんが習いに行っておられた頃ですか？

**武間** いつなさったかは、はっきり存じませんが、私がお稽古に行きかけたのが明治四十年頃でしたが、その時にはすでに、新島先生のご書斎の南側の小さいお部屋を改造して



新島八重 昭和7年3月節句に米寿を祝う

お席として使っていらっしやいましたから、お茶席に入るには必ず、先生のご書斎を通りぬげなくてはならなかったのです。

### 八重夫人と同窓会

——同窓会にもよく行かれたようですね。

**武間** 同窓会は明治二十六年に創設されました。おばさまは直ぐに会員・役員・特別会員として、この時代の卒業生達の活動によく協力して下さったそうで、明治三十一年六月

も)楽しんで出席して下さいました。昭和七年の春、米寿の祝賀会を催す準備をしていた折柄、急に御病気になられたので、そのお祝いのために集めた金三百九十円の金子と紅白の鏡餅をもってお見舞、ご全快を祈りました。昭和七年六月十四日、安らかに神様のもとに召され、同年六月十七日、栄光館で同窓社葬が行われました。勿論多数、参列しました。

おば様は日本赤十字社の篤志看護婦とし

から一ヶ年、会長に推され、活動して下さいました

由。その後、同窓会のいろいろな催しの折(総会、バザー、音楽会。時々は、クラ

ス会等々に

て、日清・日露の戦争で活躍せられたので、勲七等宝冠章と金七十円を下賜され、その後日露戦争の時、篤志看護婦としての功により勲六等瑞宝章と従軍徽章を下賜されました。

一寸つけ加えてお話し上げ度い事は、おば様は、数種のお雛様、三人官女や五人斬それにおひな様のお道具類を沢山おもちになっていました。毎年三月になると押入のお人形箱からお人形を大事にとり出して、久しぶりに会う人に話かける様に挨拶しながら、一つ一つ丁寧に顔を絹のきれでふき、雛段にかざって楽しんでおられました。お節句がすんで片づける時も、お一人で一つ一つの人形に、また来年迄と話かけて仕舞って居られたのを、よく覚えています。あのお人形やお道具類、今、どこにあるのでしょうかね。

### M・F・デントン先生

——存じません。ところで、デントン先生の事は、いろんな方が語られています。デントン先生に接しられた事が多かったでしょう。

**武間** いま、ああいう先生が一人でも半人

でもよいから居られたら、同志社も、もう少しチャンスとしていたでしょうにネ。

先生は、宣教師である事、同志社女学校の先生である事をすっかりと認識しておられましたから、こちらが礼拝におくれたり、サボったり、又先生の特にお嫌いなしぐさ(一寸化粧をして登校したり、何かごま化しを言ったりする事)は絶体にお嫌いでしたから、そんな時は、大変でした。

——礼拝には全員が？

武間 あの時分は、夏と冬の別なく、朝の七時四十五分から、校長始め教職員全員と、女学校の生徒も学生も「全員出席の事でした。」「ありましたし、先生方は順番で礼拝の司会をなさらなくてはなりませんでたから、中には苦手で困られた先生方も居られたようでした。

——礼拝はどこで？

武間 その時分は、まだ講堂とかチャペルといったものが女学校にはありませんでしたので、家政館(この建物は木造でデントン先生の寄贈で建ったもの。後に火事で消失)の二階の五十畳敷程の大きな和室で、ガールスは、皆、行儀よく坐わって。先生方は、ガールスに向い合つて椅子に腰かけておられたの

で、ガールスは、この時間行儀よく緊張してましたから、しびれがきれて立てないガールスも沢山おりました。

——よくデントン先生に、追いかけられたという話を聞きますが。

武間 礼拝の始まる一寸前頃に、デントン先生は、今出川通りの校門の辺りや、隣所の入口辺りに、自転車にのせた学校の給仕さん(男の子)を連れ行かれ、その附近を悠然と学校へ向っているガールスや、小走りしているガールスに「ホリーアップガールス」と、

時には「一寸マヌケドロボーガールス」と言いながら、給仕さんにもそう言わせて急がせて下さるんですが、時々、不心得者のガールスは、上手に校内には入ったものの、礼拝にはおかれて出にくいので、掃除具入れの戸袋や、便所に入って、かくれるのです。ところが、先生は、チャンと勘でわかり、ガールスが出てくる迄、入口でまっつておられ、Oh you bad girl(時には、Oh you dropper girl)と、お叱りを受けたのです。

——デントン先生は生徒の好き嫌いがあつたそうですね。

武間 それは、たしかに、あつたようです

が、いくら先生のお嫌な生徒でも、よく出来た時には百点、いや百二十点をつけて、Oh! you good girl!

——勉強のさせ方も変つておられたよう

武間 デントン先生が同志社女学校へ来られたのは明治二十一年(一八八八)十月八日。最初は、動物学、植物学を教えておられた。生物を教えるためには屠牛場へ行って血の滴る牛の心臓をもち帰り、生徒達の前で解剖、実験せられたという事です。

その後は英語と料理を教えておられ、日本語は絶体にタブー。時たま日本語を言われる時は全く奇妙な日本語で、「リンゴのきもの、さよなら下さい」などと(笑)。

また、入学したての生徒から五年生のガールスに至る迄、「毎日、レター下さい」と。毎日毎日、手紙を書く事は誰しも、その材料に困るものですが、先生は何でもよい、昨夜のご飯のごち走でも、猫の事でも、おばあさんの事でもと仰しやるが、生徒はその材料に四苦八苦して、とに角毎日わかつた様なわからない様な英語でレターを書いて先生にお渡しすると、先生は全校の生徒のレターを大き

な風呂敷に包んで、おうちにもち帰り丹念に

赤鉛筆で直して下さる。もし先生が東京へでもご出張の時は、必ず夜行列車にその風呂敷包をもってご乗車、車中で丹念に直したとの

事です。私が女学校に居りましたのは大正五、六年頃でしたが、やはりレターは書かされました。但しその頃は一週間に一通だったのので助りましたが、このレター書きのおかげで英文の普通の手紙の書き方や、何々の場合の手紙や、お礼状の書き方を教わりましたので、学校を出て直ぐに海外に行きました私は、ほんとうにこのレター書きで苦しんだ事が、あとになって役に立った勉強であった事を心から感謝しました。

——デントン先生は女学校の中にお住いでしたね。

**武間** 女子部校内の北東の角に木造二階建の、そまつな一棟があり、「デントンハウス」と呼ばれていました。この建物の二階の東向きの窓のある六畳足らずのボロボロの部屋が先生の寝室兼居間兼書斎で、足のふみ入れ場もない程、本や何やかやで、いつもいっぱいでした。(この家はジュームス夫人の寄附により明治四十二年に宣教師館として建てられ

たもの)

——女学校への貢献は大したものだったと聞いていますが。

**武間** 一寸やそつとで、先生の同志社、特に女学校へ貢献せられた事は申せない程、沢山あります。どなたかの紹介でデントン・ハウスへ来られた方は勿論の事、都ホテルなどに世界的に有名な方が来られた事がわかれば必ず先生は、その方達をデントン・ハウスに招き食事をさし上げながら、日本のよき、日本の皇室の立派な事、日本人の優れている事や、特に古都京都の事を吹聴して外国との親善に尽し、次に、同志社を説明し、よい教育と設備への協力を懇請なさいました。時の米国グルー大使夫妻、銀行家リンドパーク、近衛文麿公夫妻を始め天下の名士は皆、デントン先生の友人として訪れ、先生の同志社へ対する愛情にほだされ、先生を通じてオルガン、ピアノを始め土地の購入費、岩倉の寮(高商)の建築費等々が寄附されたのです。

——お客さんの御接待は?

**武間** これには、かけの大した協力者があったのです。先生のおうちにはおいなさんというおばさん夫婦がおられ、主人の方は家

の外廻りを主に気をつけ、奥さんのおいな

さんは台所を一手に引き受けておられたコックさん。先生の三度のお食事は勿論ですが、先

生が「お昼、お客様十五人食事クダサイ」と十一時頃に仰っしゃるときは、おいなさんは、腕によりをかける間もなく、アタフタとあのよく肥った体を、こまめにうごかせてごち走を作り、先生が得意になってお客様を迎えられる様にしてあげられたその誠意と手腕には、全く頭がさがりました。デザートは、先生得意の水飴と小さいアラレ、フォークの先きに水飴をクルクルとまきつけ、その先きにアラレをつけさせて客人にすすめられると、殿方は髭にアメがくっついて、ニッチもサッチもノ(笑)。皆々よく笑うので誠に和やかな雰囲気となりました。

——太平洋戦争中はどのようにしておられたのですか。

**武間** 交戦国人は、日本から引きあげよという命令が米本国から来ましたが、先生は、「どの様な危険があろうとも私は日本を去らない、終戦になった時、最初の便船で帰国し、日米親善に尽し度い」との願が叶えられ、日本に残りましたが、戦争中は、デントン邸

を一歩も出られずに、戦争の心痛と孤独感のため、身心共に弱り床についておられた日が多かったです。

戦争中は所謂軟禁状態でしたから、警察署の許可を得て星名久子先生が、ずっとお側にいらしてお世話下さいました。又当時女子部に勤務しておられた内田(安田)美智子看護婦さんが、時を得てはよく先生の面倒をみてさし上げておられました。

——武間さんでもしょう。

**武間** 片桐校長の奥様と私とは時折、お尋ねしました。但し中立売署の許可を得て。

——デントン先生を通じて、女学校はどのような寄附を頂かれたのですか。

**武間** 随分沢山ありますから、その内の主なものをあげますと、

家政館 明治三十九年 先生が自費金二千元

也で建て、これを同窓会に寄附、そして同窓会から女学校へ。

平安寮とデントンハウス 明治四十二年 W

・ジェームス夫人と令息の寄附金で。

静和館 明治四十五年 太平洋婦人伝道協会が先生へ寄附した二万弗で建てられ

た。女子部最初のレンガ造。

ジェームス館 大正二年 ジェームス夫人よりジェームス館完成のため更に六千弗と、土地購入費として尚十萬弗寄附、その一部で家政科の寄宿舎を新築。

ファウラーチャペル 大正六年 ファウラー家の娘ケートが父の記念として二万弗を先生に贈ったので、先生はこれをアメリカンボードに預け、利息を加えて昭和七年栄光館内にファウラー講堂を。

プリンプトン寮 大正八年 プリンプトン氏の寄附で完成。

染井吉野桜二十五本 大正十一年 京都府教育委員会から表彰されたので、その記念として女子部校庭に植樹。

パイポオルガン 昭和十六年 太平洋婦人伝

道協会から先生へ贈呈、先生から同志社へ贈呈された(当時はまた外人の資産凍結令があったが先生は免除されていた)昔の者はこれらの事をよく知り又その恩恵に浴していますから、感謝となつかしさがいっぱい

いですが、今の方々は、何もご存じないのでいともかんたんにとり払ったり消滅させたり……勿体ない事とこの年寄りのぐちを一言。

——終戦後は?

**武間** 昭和二十年第二次世界大戦が終りました時、先生の八十八のお祝いをデントンハウス客間で、同窓会の主催で、米将校達と同志社内外の知名の方々をお招きして、盛大に催しました。

——先生の功績は大きいですね。

**武間** 篤志看護婦会、日本赤十字社、京都府・市から、それぞれ数々の功績に対して榮譽を頂いておりますが、特に米国ウィリアムス大学から教育学名譽博士と、日本政府から勲三等瑞宝章を頂いております。

——お亡くなりになったのは、昭和二十二年。

**武間** 昭和二十二(一九四七)年十二月二十四日、クリスマス前の夜、静かに静かにデントン邸で、天に召されました。翌二十三年一月二十三日ファウラーチャペルでの同志社葬に多くの方々、特に親しみと感謝に満ちた「先生の Memory」が大勢参列しました。





昭和5年6月7日祝賀会 都ホテルにて  
前列右から大工原総長、デントン先生、新島八重夫人、松田道先生

てほしい」との遺言でしたので、長得院内の墓地に埋葬されておられます。しかし若王子山上の同志社宣教師墓地内にある先生の碑は、宣教師墓地整理の時に建てられたものです。

——長得院の住職をよくご存知だったのですか。

**武間** 極く最初の事は存じませんが、その頃は、現ご住職のお父様の、故緒形宗博様のご住職でした。この方は、花園大学の御卒業で、その当時、ハワイで開かれた汎太平洋仏教界の大きい会議に出席の際、英国貴族のローズ氏の手伝いをしながら、宗教上の事は勿論、語学の勉強をせられ、ご帰国後、長得院のお忙がしいご住職のお仕事の傍、よくデントン先生のところへ宗教上の事ばかりでなく、何かにつけて教わりに来ておられました。先生も教えたり又、教えられたりしておられた事はよく存じてお

ります。そんな関係でしようかお子様達三人とも、同志社幼稚園の卒園生です。ご長男は現長得院ご住職で、立派にお父様のあとをついで居られます。

——毎年ご命日には多勢墓参をなさるとか。

**武間** 私達同窓会の者達は、同志社本部、女子大学、女子中高、幼稚園の皆様をお招きして、毎年十二月二十四日の御命日に、先生の墓前礼拝を行っております。いつも長得院老奥様のご好意によって、お墓をお守りできています事を感謝しております。

#### 同志社女学校専門学部時代

——昔は校内に寮があったようですね。

**武間** 明治十年に女学校が創立した時から、新島八重夫人の御実母山本佐久子さんが最初の舎監として就任という記録がありますから、最初から寮があったようです。又明治四十二年にジェームス夫人からの資金で平安寮が建ちましたので、熱心なクリスチャンの富森幽香子女士（巖谷小波の令姉）が舎監となりました。その後、益々寮生が増加しましたので、常盤寮、プリンプトン寮（プリンプ

——デントン先生のお墓はなぜ若王子でなくて、相国寺山内にあるのですか。

**武間** 「自分は新島先生程えらくないから若王子山上ではなくて、相国寺山内の長得院の和尚様にお願してあるからその墓地に埋め



昭和15年11月 米国グラー大使夫妻とデントン先生(デントン・ハウスにて)

トン寄贈)、大沢寮(大沢寄贈)が次々に建  
てられ、よい舎監の先生達によって規則正し  
い生活がなされていきました。

寮内での毎朝夕の礼拝は勿論、日曜日の同  
志社教会の朝拝、夕拝には、先頭には舎監の  
先生、最後はデントン先生がついて整然と列  
を作つての出席と、又、大正の始め頃、寄宿

生達によって夕食後、讚美歌の練習をしてい  
たのがきっかけで、ミリアムコワイヤーに発  
展し、毎朝の学校と同志社教会への礼拝のコ  
ロイヤルとして奉仕しておられました。

ここ数年前の女子部構内の新教室建築のた  
め由緒あるすべての寮がとり払われ、学外に  
新しい寮が建てられました。昔の様な寮の  
気分は味えないとのこと、残念な事です。

——武間さんはご自身の意志で同志社女専  
の英文科へ入られたのですか。

武間 府立第一高女の友人、四、五人連れ  
だつて、同志社へ参りました。その当時は入  
試が無かつたからです。楽々と手をふつて  
入れたんですが。

——公立と同志社ではちがう面があつたで  
しょう。

武間 礼拝にキチンと出る事などは、府一  
で規則を守る事など、きたえられていました  
から何ともありませんでしたが、英語、英語  
で全くねえ。聖書、英文学、英作文、英会  
話、体操、音楽に至る迄、皆外人の先生方  
で、何を言っておられるのやらさっぱり分ら  
ず、無我夢中以上でした。然し、今以て感謝  
しているのは、特に英会話の時間には一人ず

つ、一言ずつ発音が正しく出来るまで直して  
下さった事や、デントン先生のレター書きな  
どでした。おもしろかつたのは、体操の時間  
などよくまじめな顔で右と左をまちがえて気  
がつかなかつたので、皆でよく笑いました。

——どんな先生がおられましたか。

武間 専任教授では、海外の大学で御勉強  
になつた松田道、原口愛子、中瀬古六郎等立  
派な先生達。外来講師としては当時現役の京  
大教授が、お忙がしい時間をさいて来て下さ  
つておりました。例えば、英文学は上田敏教  
授、厨川白村教授、国語は藤井乙男教授、心  
理は藤井健次郎教授等々の先生方が、講議に  
来て下さつておつた事は、今から考えると何  
とすばらしい事であつたかと感謝しておりま  
す。

——英語に困られたとのことですが。

武間 よくまあ、卒業させて頂けたものと  
自分ながら感心し、又、感謝しています。  
ほんとうに、先生方が専門の学問を教えられ  
るばかりでなく、同志社精神とキリスト教主  
義の学校の先生であるという信念のもとに授  
業をし、学生に接して下さつておりました事  
や、殊により多くの友達に恵まれた事は全く

大きい事で感謝の外ありません。何とか現在の同志社も、ただ学問のみを教えるばかりの学校でなく、もっとも精神面の教育をして頂き度いと、口はばったい事ですが心から願っております。

——同窓会と幼稚園について何か。

**武間** 明治三十年に出町栴形の一民家を借りて宣教師ラーネッド先生によって開かれたキリスト教伝道のための講義所に、デントン先生によって生れた小さい出町幼稚園が、ラーネッド夫人の協力によって多くの困難に会い乍ら、今出川幼稚園となり、よい保育がなされていたのですが、昭和九年に経済的な問題で行きつまった時に、我々の同窓会にその経営をしてほしいとのデントン先生の熱心さにはだされて約十年間、幼稚園経営のお手伝いをしました。

その後、昭和二十二年に財団法人同志社(昭和二十六年より学校法人となる)へお返しで、同志社幼稚園となりました。

明治三十年出町幼稚園の開園以来、毎朝の礼拝は園長はじめ、先生方、園児全員で、堅く今なお守られております。全同志社中、幼稚園は最も小さい存在ですが、一生のうちの

一番大切な幼児教育の場なのです。

この幼稚園で、神に祈り神に感謝する事を覚え、又先生方から聞く聖書のお話は、心の奥深くに残る事と思えます。ほんとうに同志社の幼稚園の存在は、大同志社の一隅に輝く金のお星様なのです。

(一九八六年六月十六日、武間同窓会名誉会長宅で収録)

同志社談叢 第六号

論文

- 磯貝雲峰の生涯と文学……………河野仁昭
- 『荒村遺稿』未所収松岡荒村同志社時代の作品……………天野 茂
- 星野徳治の日記とその時代……………相川尚武
- 棚あげされた同志社憲法……………和田洋一
- 同志社と香里学園の合併問題……………喜多正明
- 香里所有の資料を中心にみた——

「新島襄旧邸」保管の石鏝をめぐって……………鈴木重治

——石器時代の環境と文化——

資料

同志社常務委員会記録

自・明治三十七年四月廿七日  
至・明治四十四年七月十日

『同志社談叢』既刊総目録

新島襄に関する文献ノート・その五……………河野仁昭

(頒価一、〇〇〇円)

発行・同志社社史資料室 取扱い・同志社収益事業課

(電〇七五―二五一―三〇三七〇八)